



令和2年8月7日

報道機関各位

高齢者の難聴

心臓血管疾患や短い教育歴でリスク増加

富山県認知症高齢者実態調査の結果より

富山大学地域連携推進機構地域医療保健支援部門は、平成26年に富山県が実施した富山県認知症高齢者実態調査の追加分析を行い、高齢者の難聴に関する新たな知見を得ましたので公表します。

富山県認知症高齢者実態調査の対象者は、県内の65歳以上の高齢者から0.5%無作為抽出された1537人のうち、同意の得られた1303人(同意率84.8%)です。今回の分析では、不完全回答および認知症のある人を除いた1039名を対象に、難聴の有無と、生活習慣病や社会経済的要因(教育歴)との関連性を評価しました。敦賀市立看護大学の中堀伸枝講師、富山大学の関根道和教授らが分析しました。

その結果、対象者のうち126人(12.1%)に難聴がありました。また、心臓血管疾患(狭心症・心筋梗塞)の既往のある人や教育歴が短い人で、難聴のリスクが増加することが分かりました。

高齢者の難聴は「生活上の不便」だけではなく、他人との交流を避けて家に閉じこもる原因となることや、認知症発症や死亡率を上昇させることが知られています。補聴器等の使用により症状は改善しますが、根治的な治療法がないことから、予防が重要となります。今回の研究結果から、難聴を予防して高齢期を健やかに過ごすためには、若年期における十分な教育機会の確保や成人期における心臓血管疾患の予防など、小児期から高齢期の一生涯にわたる総合的な対策が重要であることが分かりました。

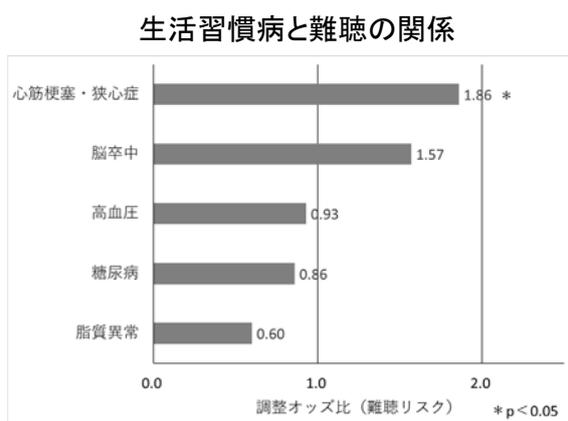
調査結果の詳細は、8月5日に英国の老年医学誌BMC Geriatricsに掲載されました。高齢者の難聴のリスクを包括的に評価した貴重な研究と考えています。

【本件に関する問い合わせ先】

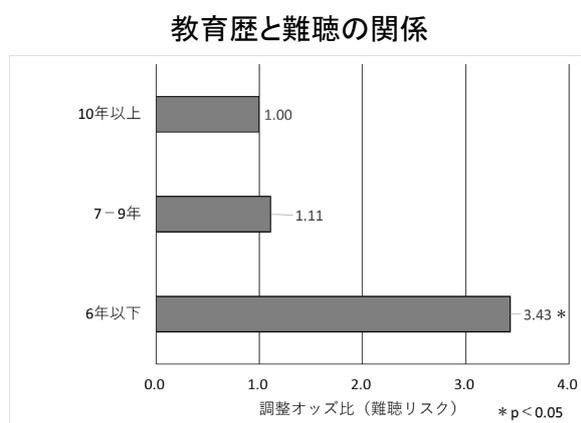
富山大学地域連携推進機構
地域医療保健支援部門長 関根道和
930-0194 富山市杉谷 2630
TEL 076-434-7270 FAX 076-434-5022
E-mail: sekine@med.u-toyama.ac.jp

(図1) 心臓血管疾患があると難聴のリスクが上昇

- 生活習慣病と難聴との関係では、心筋梗塞・狭心症(心臓血管疾患)の人の難聴に対する調整オッズ比(リスク指標)は 1.86 と統計学的に有意に上昇しており、約 2 倍のリスクがあると考えられます。
- 脳卒中の人の難聴に対する調整オッズ比は 1.57 と上昇していましたが、統計学的には有意ではありませんでした。高血圧、糖尿病、脂質異常は、調整オッズ比の上昇を認めませんでした。
- 音は、内耳の蝸牛にある有毛細胞で感知されます。その後、聴神経から大脳に伝達され、音として認識されます。動脈硬化性の心臓血管疾患があり血流障害が発生する場合は、音の感知能力や認識能力が低下して難聴になることが推察されます。



(図2) 教育歴が短いと難聴のリスクが上昇



- 教育歴が短いほど、難聴に対する調整オッズ比(リスク指標)が上昇する傾向にありました。
- 教育歴が 10 年以上の人を基準とした、教育歴が 6 年以下の人の難聴に対する調整オッズ比は 3.43 であり、短い教育歴の難聴に対するリスクは約 3 倍といえます。
- 短い教育歴は、喫煙などの望ましくない生活習慣や各種の生活習慣病になりやすいことが知られています。それらが最終的に難聴のリスクにつながると考えられます。

出典: Nakahori N, Sekine M, Yamada M, Tatsuse T, Kido H, Suzuki M. Association between self-reported hearing loss and low socioeconomic status in Japan: Findings from the Toyama Dementia Survey.

URL: <https://bmgeriatr.biomedcentral.com/track/pdf/10.1186/s12877-020-01680-y>